



中国のジオパークにおけるジオツーリズムの現状と課題
-伏牛山世界ジオパークの事例から-

**A Study on the Present Situation and Problems on
Geo-tourism in Geoparks of China - A Case Study of Funiushan Global
Geopark -**

楊 燕（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科・院生）・深見 聡（長崎大学環境科学部・准教授）

Yang Yan Graduate School of Fisheries Science and Environmental Studies, Nagasaki University

Fukami Satoshi, Ph.D. Associate Professor, Faculty of Environmental Studies, Nagasaki University

摘 要

ジオツーリズムは、大地の遺産の魅力を地域が主体的に発信し、その持続的な展開を指向する観光形態である。同時に、それらが多く展開されているジオパークの仕組みについても、わが国では関心の高まりが見られつつある。本論文は、もっとも早くからジオパークの取り組みを進めてきた中国の事例に注目し、伏牛山世界ジオパークを管轄する行政職員を対象とした聞き取り調査の結果から、ジオツーリズムを推進される現状にみられる利点と問題点を把握して今後を展望することを目的として論じた。結果、ジオツーリズムを確立する際に不可欠な地域住民の参画面で理念と現実の乖離の顕在化とその実質化に取り組む必要性が明らかになった。

I はじめに

1. 問題の所在と目的

日本におけるジオパークの知名度は、2009年に3つの世界ジオパークが誕生して以降、徐々に浸透しているようである(目代ほか, 2012)。現在までの期間は、ヨーロッパや中国といったいわゆるジオパーク先進地の事例に学び、質の高い日本型のジオパークを模索していく段階にある(矢島, 2009)。一方、中国では、世界のなかでも早期にジオパークに関心を寄せてきたこともあり、世界ジオパークの数は世界で最も多く認定されている。そして地質遺産を積極的に活用することにより、地域振興に対して、大きな成果を挙げている。ユネスコ事務局はかつて「中国は先駆者であり、世界ジオパーク運動の推進力である」とまで述べている¹⁾。

世界ジオパークネットワーク(GGN)は、ジオパークを下記のように定義している(深見, 2010)。

- 1)地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。
 - 2)公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。
 - 3)ジオツーリズムなどを通じて、地域的持続可能な社会・経済発展を育成する。
 - 4)博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。
 - 5)それぞれの地域の伝統と法にもとづき地質遺産を確実に保護する。
 - 6)世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる。
- また、ジオパークでどのような具体的な活動が

行われているかという点について、2004年に北京で開催された First International Conference on Geoparks (中国語では「第1回世界地質公園大会」と表記)の場においてユネスコ地球科学部長(当時)の F.W.Eder 氏が次のように端的に表明している(岩松・星野, 2005)。

- 1)保全…次世代のために地質遺産を守る。
- 2)教育…地質景観や環境問題について広く大衆を教育し、地質科学に研究の場を提供する。
- 3)ジオツーリズム・・・持続可能な開発を保証する。

中国は、中央政府が国内独自の制度として国家地質公園制度を確立している。陈安泽(2003)によると、中国の国家地質公園とは、特殊な科学意義、稀有な自然、美学的な鑑賞価値をはじめ、ある程度の規模や国内を代表する地質遺産を持ち、さらに自然景観や人文景観と融合した特定の地域をいう。また、地質遺産の保護、地域経済の発展の促進、文化と環境の持続可能な発展を趣旨とし、人びとに科学的に裏づけられた質の高い観光、レジャー、療養、研究、地球科学の普及など教育の場を提供するものとされている。さらに、中国国土資源部はジオパークを整備する意義として、①地質遺産の保護に応じる、②「精神文明建設」²⁾のためになる、③研究や地球科学の普及する教育が行う場所を提供する、④地質資源を活用する手段の1つになる、⑤地域振興や経済を発展に貢献する、⑥地質遺産と社会経済の間に新モデルを構築する、の6点を掲げている³⁾。

中国ジオパークネットワーク(CGN)によると、地質科学の普及活動を実施する上でジオパークは生きた教材であり、市民に地質科学を普及する上で重要な役割を果たしうる。加えて、中国におけるジオパークの急速な増加は観光産業に刺激を与え多くの雇用機会を生み出した。2010年の観光産業における直接の被雇用者数は26万6,600人で、間接の被雇用者数は215万4,600人に達している⁴⁾。2010年末までに中国国家地質公園の観光客数

は4億3,800万人、入場料収入は226億4,900万元に達した⁵⁾。これは中国のジオパークが果たす観光的な側面における実績が着実に伸長していることを物語る。その背景には、中国の世界ジオパークは風景の美観、宗教・歴史の観点を重視しながら、すでに人口に膾炙されている行楽地などが多く選択されているようであるとも指摘されている(大野・岩松, 2005)。

現在、国内外を問わず多くの研究者が自国のジオパークの現状と今後のあり方を探るために、中国のジオパーク、とくに世界ジオパークに認定された地域を対象とした研究に取り組んでいる。その結果、行政や住民がジオパークに対するF.W.Eder氏の言う三大活動意義の認識、すなわち、ジオパークが大地の遺産を保全し、一般市民の教育活用に有意義な存在として、経済的寄与も含めた地域社会の持続可能な発展を促すための手段として有効であるとして注目されつつある。このように、ジオパークは今後の地域の持続的な発展を考えていく上で重要な役割を担っていくことが期待される(赵逊・赵汀, 2009)。

一方で、中国の世界ジオパークの抱える課題を指摘した先行研究もみられる。その多くは、中国のジオパークは自然保護区や国家森林公园等にも属する地域がほとんどであり、「多頭管理、多頭建設」、すなわち、各個別の行政機関による重複管理、重複した施設建設の問題など、各行政機関の‘縄張り意識’が生じ、歩調を合わせる点への改善を説いたものである(董静ほか, 2006)。また、世界ジオパークに対応する法体系が十分とは言えず、効果的な規則の整備が急務であり(许涛・田明中, 2010)、観光客数の増加によって自然環境に対する悪影響もたらされる過剰な開発を懸念するものが多い。

本稿は以上の事実認識に立って、中国のジオパークにおける観光(ジオツーリズムの現状と課題について論じる。具体的には、中国河南省の伏牛山世界ジオパークを対象として聞き取り調査をお

こない、中国のジオパークの現状と課題についてジオパークの運営に携わる職員の意識を把握する。その上で、中国のジオパークにおけるジオツーリズムの今後を展望することを目的とする。

2. 研究の方法

筆者らは、2012年9月10～17日に伏牛山世界ジオパークを管轄する河南省嵩県国土資源局において資料収集をおこなうとともに、白雲山管理局において職員を対象とした聞き取り調査をおこなった。本稿ではそれらのデータをもとに、中国における世界ジオパークにおけるジオツーリズムの問題点について明らかにする。なお、次章のII.1およびII.2については、河南省嵩県国土資源局で提供された資料『走进嵩县扩展园区-中国伏牛山世界地质公园地质导游手册』(河南省嵩县国土资源局・河南省嵩县旅游局・河南省国土资源科学研究院編、2010年刊)⁶、『总体规划(2010～2020)专项研究报告—河南省嵩县白云山省级地质公园、中国・伏牛山世界地质公园嵩县扩展园区』(河南省嵩县人民政府編、2010年刊。以下、『総体計画書』と記す)をもとに筆者らが整理したものである。

次章では、まず中国のジオパークと伏牛山世界ジオパークの概況を見ていこう。

II 中国のジオパークおよび伏牛山世界ジオパークの概要

1. 中国のジオパークの概要

中国において、地質遺産の保護に関して監督管理の役割を担っているのは国土資源省である。世界ジオパークの制度に先駆けて、中国では1985年に国家地質公園の制度が誕生しており、1987年、地質鉱産省(前・地質鉱産省)が地学上の自然保護を目的とした地質公園を選定している。さらに1995年には地質遺産保護規則を制定した。

1999年4月、ユネスコ第156回執行委員会において、『ジオパーク計画』(UNESCO Geoparks)が策

定され、中国がプログラムのモデル国の1つに認定されたことから、国内でのジオパーク制度の整備が積極的に推進された。2000年、国土資源省は公式に国家地質公園の設立に乗り出し、翌年、雲南省の石林をはじめ11か所が初めての中国国家地質公園に認定された。2004年、安徽省の黄山、江西省の廬山、河南省、雲南省の石林、広東省の丹霞山、湖南省の張家界砂岩峰林、黒竜江省の五大連池、河南省の嵩山の8か所が、GGNから世界ジオパークに認定された。さらに2006年には、山東省の泰山、河南省の王屋山・黛眉山と雷瓊、北

表1 世界ジオパークの国別分布

2012年9月現在。GGNホームページ(2013年11月1日閲覧)をもとに筆者作成。

国名	認定数
中国	27
イタリア	8
スペイン	8
イギリス	6
ドイツ	5
日本	5
フランス	4
ギリシア	4
ポルトガル	3
オーストリア	2
ノルウェー	2
韓国	} 各1
マレーシア	
ベトナム	
インドネシア	
ブラジル	
アイスランド	
フィンランド	
アイルランド	
ルーマニア	
クロアチア	
チェコ	
ハンガリー	
カナダ	
ドイツ・ポーランド	
アイルランド・北アイルランド	
ハンガリー・スロバキア	
スロベニア・オーストリア	

京の房山、黒龍江省の鏡泊湖、河南省の伏牛山の6か所が新たに世界ジオパークに加わった。

2012年9月現在、世界ジオパークに認定されているジオパークは28か国、92地域に上る。このうち中国は全世界の総数の3分の1に近い、27地域が分布している(表1)。この背景には、国土資源省が認定し国レベルの国家地質公園が140地域以上あることから分かるように、地質遺産に関する制度が比較的充実していたことが挙げられる⁷⁾。具体的に、中国の地質公園は、世界ジオパーク(世界地質公園)、国家地質公園、省地質公園、県(市)地質公園と4つのランクが置かれている。このうち国家地質公園については、中央政府国土資源省が審査をおこなう。省地質公園と県(市)地質公園の場合は、省政府を代表する省国土資源庁や県(市)

政府がそれをおこなう。

2. 伏牛山世界ジオパークの概要

伏牛山世界ジオパークの面積は1340.93km²、自然保護区面積1296.54km²である。河南省西部に位置し、中国大陸を大きく南北に分ける境界領域ともいべき重要な地学的要素を備えている。地質学的には伏牛山は秦岭山脈の東側に連なる、いくつかの山脈(支脈)のうち、大規模なもの1つである。中生代後半に始まる造山運動の「燕山造山運動」、続いて新生代前期にかけて長い地質的時間をへて起きる、インド亜大陸とユーラシア大陸の衝突による「ヒマラヤ造山運動」などが山脈形成にかかわっている。その造山活動の間、複雑な褶曲・断層活動を繰り返して現在の山脈群となった。



写真1 伏牛山世界ジオパークのジオサイトの1つ・西峡恐竜化石博物館

(2012年9月12日筆者ら撮影)

山々はこの間、地球的規模での気候変化の影響を受けながら、降雨と河川の浸食によって谷斜面が刻まれ、現在の多様な自然景観を持つ地域へと変遷していった。この景観形成については約 10 億年の期間を要し、今日われわれが目にする景観にいたったと考えられている。

伏牛山世界ジオパークは河南省の南陽市、平頂山市、洛陽市にまたがって位置している。2006 年に世界ジオパークに認定された当時は伏牛山脈の奥地に位置した河南省の南陽地域のみを区域とした。2008 年には嵩山世界ジオパークと、2009 年には興文世界ジオパークと姉妹協定を締結している。温帯および亜熱帯の典型的な自然林・原生林が広く分布し、多様な野生動物と鳥類の生息地、あるいは貴重な天然植物の宝庫ともいえる「宝天曼」世界生物圏自然保護区がある。「一秋林」の滝あるいは龍潭瀑布群をはじめ、花崗岩の峰々が織り成す典型的な景観の 1 つである「南陽独山玉」、あるいは内郷県衙や南陽府衙、さらには南陽四聖など有名な人文的観光スポットも併せ持ったジオパークといえる。自然景観だけでなく、文化や歴史といった人文的な資源もこの“大地の遺産”の重要な要素となっており、「南陽府衙」「内郷県衙」などの観光地は、南陽四聖(張衡・諸葛亮・張仲景・范蠡)で有名な文人たちの足跡と重なり合って、特徴ある歴史的スポットも多い。名産の「南陽独山玉」の名で売られる、ヒスイやメノウを加工した宝石類の産出・生産も、この地域の特色をなしている。この山地一帯の地質時代初期からの変遷を証明する一つの例が、世界の 9 大奇跡の名称で名高い「南陽恐竜の卵化石群」の豊富な出土・発見であろう。卵の化石だけでなく恐竜の骨格化石も発掘されている(写真 1)。古生物学上、極めて重要な研究領域にもあたる。恐竜の遺物に限らず、この天然林の一帯には、「生きた動植物化石」とでもいふべき、古代からの特徴を今に伝える生物群が残り、植物では、たとえば「香果樹」「水青樹」「連香樹」「山白の木」などが代表的なものとして挙げ

られる。動物群では、オオサンショウウオのような両生類が「生きた化石」のような進化の過程で古い特質を残す生物とされる。

本ジオパークの植物被覆度は 80% を越え、温帯と亜熱帯の原生林がみられる。多様な野生動物が生息し、また鳥類などの貴重な繁殖地ともなっている。この地区は「宝天曼世界生物圏自然保護区」にも指定されている。それらのジオサイトは 1 つずつが園区として、明確に出入り口が設置されている(写真 2)。

2009 年、河南省の洛陽市欒川県と嵩県が伏牛山世界ジオパークの拡大地域としてその範囲に組み込まれた。したがって、2007 年に河南省国土資源庁に認定された嵩県白雲山省級地質公園も伏牛山世界ジオパークのジオサイトの 1 つになった。このようにいくつかの行政区域にまたがるジオパークは中国にとっては珍しいことではない。

3. 聞き取り調査実施地(白雲山ジオサイト)の特徴

嵩県白雲山ジオサイトは、稀有な地質科学的価値を持つ三叉裂谷系地質遺跡および高い美観学的価値を持つ花崗岩構造景観を主体とし、自然と人文景観が融合した独特な区域と言える。

これらを保護するために、嵩県政府は国土資源省から公布された『国家地質公園計画編制技術要求』にもとづいて地質公園の全体計画を制定した。中国国土資源部が 2010 年に公布し、付属文書を含め、中国各地域の地質公園計画の改善に大きな役割を果たしている。また、この内容はすべての国家地質公園や世界ジオパークに適応すべき計画事項である。また、地質公園の所在する地方政府と国土資源管理部門は、地質公園計画を立てることとなっている。嵩県政府は『総体計画書』のなかで、短期目標(2010~2012 年)、中期目標(2013~2016 年)、長期目標(2017~2020 年)と期間を設け、地質公園の建設を通じて嵩県の観光に新たな発展を促し、観光資源大県から観光による経済強県



写真 2 伏牛山世界ジオパークの龍潭溝ジオサイト出入口

(2012年9月14日筆者ら撮影)

転換を目標に掲げている。さらに、2016年までに嵩県をジオツーリズムの拠点とし、観光業を本県の中心産業にすることや、2020年までに観光業の振興によって経済大県化を図り、ジオパークによって地質遺産の保護や環境保護を促し、地域の経済発展を遂げることが、長期目標に挙げられている。それに応えるべく、嵩県は県国土資源局の中に、県国土資源局、旅遊局、林業局から構成される嵩県地質公園管理事務所を設置している。管理事務所は全県における地質公園に対して監督管理の役割を果たす部署であり、総合課、地質遺産保護課、質量検査課、エンジニアリング技術課の4機能部門からなる。地質公園の建設資金は主に嵩県政府投資と民間からの融資によって賄われている。インフラについては、1つ1つが独立した位置にあるジオサイト内には、博物館、科学教育のための映画館やテーマ碑(ジオパークを象徴する記念碑)からあらゆる施設の整備や看板の設置まで、すべて『国家地質公園計画編制技術要求』を基準

に進められている。その過程で、豪華なセッティングを施した展示室、博物館、情報化映画館など、箱モノに多額の資金が投じられてきた。

白雲山がジオサイトになる前の2006年、県内の観光客数は293万人、入場料収入は4,626万元、観光総合収入は5.6億元であった。省級地質公園に認定された2007年、県内観光客数は430万人に上り、入場料収入は5,040万元、観光総合収入は6.3億元に増加した。さらに2008年には、県内観光客数は461万人、入場料収入は5,760万元、観光総合収入は7.2億元、2009年には、県内観光客数477万人、入場料収入6,480万元、観光総合収入8.1億元に達した。このことから、伏牛山世界ジオパークの誕生は、当該地域におけるジオツーリズムの取り組みを促し、白雲山ジオサイトも、その一翼を担ったと考えられる。

『総体計画書』は、ジオパークの概要、地質公園の発展戦略と目標、地質景観および評価、全体的な配置、地質景観および生態環境の保護、地質

公園における学術研究、地質公園の解説システム、科学教育活動、観光の振興、地質公園の情報化整備、基本とサービス施設、土地利用と社会制御、地域社会の行動計画、計画実施の保障措置などの大きな項目から構成されている。また、それらの項目はさらに小項目に細分化されているが、たとえば、地質公園の解説システムは、解説システム計画の基本原則、地質博物館と科学教育のための映画館の整備、テーマ碑の整備、解説板、公衆インフォメーションの掲示板、出版物、解説システムの維持と更新といった内容を含んでいる。観光の振興については、目的、顧客市場、観光プロジェクトの開発、ジオツーリズムの記念品開発について詳述されている。計画実施の保障措置については、管理機構の設置、職能区分の設置、プロの技術者の配備、ガイド、管理職務担当者の育成などが挙げられている。

総体計画のなかでは、ガイドに対して、文化素

養、自然・文化遺産保護の意識、外国語能力の向上が求められている。これらを達成するために、知識獲得と能力養成のそれぞれについての講座が開講されている。知識獲得は、地質公園の基本概念および基礎知識、地質遺産と景観の成立背景とその価値、景観と生態多様性の関係、地質構造の歴史(地史)、歴史文化と地質の関わり、ガイドの方法などが扱われている。能力養成は、即興性の高いコミュニケーション能力の訓練、緊急事態時の対策訓練、救護知識や基本技能の訓練などが扱われている。

また、同計画は、解説板について、科学的、大衆的、面白さ、国際通用性、一般市民にも分かりやすい表現で地質景観や地球現象を解説するように求めている。さらに、外国語の解説内容、解説板の素材や色およびデザインも周辺の景観を配慮したものとすよう記されている(写真3)。

III 白雲山管理局における聞き取り調査

1. 白雲山ジオサイトの概要

白雲山は森林生態区で、花崗岩が形成する構造地形、水流による侵食地形が形成する景観で知られている。海拔 1,320m のポ馬嶺は揚子江、黄河及び淮河水系の分水嶺であり、白河、伊河及び汝河の起点でもあり、北亜熱帯と暖温帯気候区の境目でもある。全面積は 168km² であり、なかには、中原の第一峰と呼ばれる海拔 2,216m の玉皇頂がそびえている。また、204 種類の動物、1,991 種類の植物が生息している。森林被覆率が 98.5% 以上で、夏の最高気温は 26 度を超えないことから、理想的な観光レジャー、とくに避暑地として知られる。行楽シーズンは 6~8 月、1 日あたり 6,000~7,000 人以上の観光客が訪れている。ジオサイト内にリゾートビレッジも整備されているために、自然を楽しむ長い期間で滞在する観光客も存在する。このような観光客の急増は、廃棄物の増加、植物の摘み取りの問題を顕在化させた。



写真3 白雲山ジオサイトにある国際通用解説板
中国語のほか、英語・日本語・韓国語表記がなされている。2012年9月14日筆者ら撮影。



写真 4 白雲山ジオサイト内で営業する飲食店

(2012年9月14日筆者ら撮影)

2. 聞き取り調査の結果

聞き取りは、非統制的な自由発話によりおこなった。それら発話者の発話のうち、本稿の目的と関わりのある内容を、文脈を損ねない範囲で抽出し、整理したものを以下に記していく。

白雲山管理局は行政管理部門であり、直接的な経営活動、すなわち商業的活動はおこなわない。ゆえに、別に嵩県白雲山旅遊有限責任会社を設立し傘下に置くことで、白雲山内のジオサイトにおける経済活動に取り組むという形態をとっている。一方、旅游局や国土資源局などは業務指導の役割を担っている。また、観光マーケティングは有限責任会社が政府や行政と連携しつつ取り組んでいる。

ジオツーリズムを推進する一環として、白雲山にはさまざまな入場券の割引制度がある。団体や高齢者、学生、軍人、障害者など福祉の観点から優遇措置が必要な人々に対する割引制度が制定されている。また、割引制度の運用の実際については、毎年見直し改善に努めている。その他、観光

客に二次入園制度を提供している。これは、ジオサイトの分布する範囲が広大であることから、観光客が2日目は無料で入園できる措置を講じる制度である。園内移動のために発行されたシャトルバスの乗車券も2日間有効となっており、サイトのなかの宿泊施設を利用する観光客には園内の滞在時間の制限が設けられていない。

中国では地域住民を参加対象とした地質公園の普及教育活動が比較的少なく、かわりに科学普及に関する特定のテーマについて大学や学会と連携し、地質公園内に教育拠点を設立する活動が活発である。地域住民を中心としたボランティア活動などもおこなわれていないものの、住民自身がジオサイト内外に民宿やレストラン、または土産品店などの経営を通じてジオパークとの関わりを有している。現在、民宿は約30軒存在し、1軒あたりの年収は20万人民元(日本円で約260万円)という(写真4)。土産物品店や飲食店も開業しているが、一方で白雲山は伏牛山世界ジオパークに属するだけでなく、国家自然保護区、白雲山国家森林公园、



写真5 ジオサイトに掲げられたガイド紹介の看板
(2012年9月14日筆者ら撮影)

嵩県五馬寺林場でもあるため、それらの経営形態や規模が必然的に制限される場合が多い。よって、関係する行政管理部門が多岐にわたり、いわゆる縦割り行政の弊害が起きやすい点は否定できない。また、地域経済の活性化を目的とするジオツーリズムによる観光誘致については、発信力が不足しており、さらに多くの広告媒介やメディアを活かしてアピールする必要性が認められ、ジオパークの目的と既存の保護制度との両立を図る上での分岐点に立っている。たとえば、白雲山は国家自然保護区のため、新たな施設建設が厳しく禁止されているが、今後中国において成長著しい中間所得層を呼び込み得るジオツーリズムを発展させていくには、景観などの保護と開発の調和に配慮をしつつ、人びとをさらに惹きつける仕組みの構築が必要である。

ガイド制度については、白雲山のジオサイトでは国家旅遊局から承認された「国導証」、すなわち、国からの許可証を持ったガイドに解説を依頼することで、観光客にジオツーリズムを体験させる仕組みが構築されている。これも市民への一般的な教育普及という点を考慮し登場した制度であるという。国導証は、「初級」「中級」「高級」に分かれており、ジオサイトへの入場券売り場で、ガイド

についての情報が公開されている。各ガイドの情報が写真付きで紹介された看板には、ガイドの氏名、学歴、国導証の級数、使用可能言語や得意とするガイド分野などが示されている(写真5)。ガイドサービスは有料であり、料金はコースによって異なる。観光客は、各ガイドに関する看板の掲示内容を参考にしながら、ガイドを指名しジオサイトを解説してもらうことが可能となっている。

IV 考察

中国におけるジオパークへの取り組みは、地質公園の名称のもとで世界ジオパーク制度が確立する以前の1980年代から、中央政府の国土資源省によって整備が始まった。その後、ユネスコが支援するGGNが実務を担う世界ジオパークの制度に適応が図られたため、中国国家地質公園の定義は、GGNとの定義は多少異なる点があるのも理解できよう。しかしながら、中国の「国家地質公園制度」が現在の世界ジオパークに大きな貢献してきたことは間違いない。具体的に言及すれば、目的に大きな違いは見られないものの、ジオパークの定義において公的機関・地域社会ならびに民間団体が運営組織として明記されている点に対して、中国は政府主導の運営方式を採っており、もっとも大きな特徴とも言えるだろう。また、国家地質公園の定義に「レジャー、療養」という言葉が登場する点や、実際の聞き取り調査の結果からも、中国の世界ジオパークは地質の景観、歴史や文化の観点を重視しながら、すでに多くの人々に認知されているテーマパークのような要素を持つことも指摘できる(写真6, 7)。

ところで、中国のジオパークのほとんどは主に国内でも開発途上地域、すなわち国内でも経済的な生活水準が低く、交通が不便な地域に位置しており、そのような地域の住民の生活の改善が国家政策としても必要とされている。このような背景もあって、ジオパークの整備やジオツーリズムの



写真 6 伏牛山世界ジオパーク内にある竹製の筏乗り体験のようす

(2012年9月15日筆者ら撮影)

実施に関しては、ほとんどが地方政府からの指導や監督にもとづき進められている。そして、国や地方政府と密接に関わった観光事業者がジオツーリズムを担っており、観光客の理解を深め、地質学的知識を高め、当該地域の地質遺産への関心喚起を図る点で、中国独特の制度も加味されていることが分かる。

また、中国の世界ジオパークには有料ガイドならびにその団体の設置が制度化されており、この仕組みは他国のジオパークに対しても示唆的なもの位置づけられる。ただ、ジオパークへの地域住民のかかわりが、観光を含む経済活動以外のつながりに乏しく、地域住民を中心にジオパークの普及に貢献することを目的とした協働の度合いは低いと言えよう。

以上のことからより、中国のジオパークが有する現状を利点と問題点ごとに整理するとそれぞれ次のようにまとめられる。

【利点】

- 1) 1つのジオパークの面積が広く、地球科学上、重要な意義を有する景観や、豊かな水・森林資源からもたらされる多彩な生態系、それらの自然資源に加え、中国の歴史的人物に関するストーリーなど人文的資源が豊富なサイトも多く点在し、多くの人々の関心を呼ぶ要素が融合したテーマパークのような性質を持っている。
- 2) 主に国内でも開発途上の地域に位置しており、観光による地域経済の発展を目標としたジオツーリズムを推進するために、国や地方政府との強力な連携体制が築かれている。
- 3) 国土資源省から定められた指針や制度に基づいてジオパークの整備や運営をおこなうことで、ジオツーリズムの質の担保が図られており、ジオパークごとにばらつきが小さいと考えられる。



写真 7 伏牛山世界ジオパーク内にある恐竜のモニュメントと遊具

(2012年9月12日筆者ら撮影)

【問題点】

- 1) 利潤追求のための開発が中国では支持されやすい傾向があり、ジオパークに関しても同様の傾向がみられる。
- 2) 地域住民が運営に参画する場面が乏しいため、地域住民に対する教育活動が不十分である。つまり、持続可能な発展に関して不可欠な、環境保護や教育の分野により多くの参画の視点を備える余地がある。
- 3) 中国のジオパークの多くは、国家自然保護区や国家森林公园などにも属するため、ジオパークが目的とする経済活動が制限を受けることが多い。これは政府どうしの協働や強力な推進体制が確保され質の維持が図られる一方で、縦割り行政による弊害もみられる。

これらの点から導出されるのは、中国のジオパークはジオパークが掲げる3つの具体的活動のバランスをどのように担保していくのかという課題である。つまり、保護・教育・持続可能な発展を、ジオツーリズムの形態に改変を加えたりしながらどのように達成し得るのかを再考する時機にあるものと考えられる。

ここで注記しておきたいのは、これらの利点や課題が中国のジオパークに固有のものではないという点である。日本のジオパークにおいても、同様のことは指摘されており(深見・有馬, 2011)、いずれにおいても利点の伸長と問題点の改善に努めていく必要があるだろう。

V おわりに

本稿は、わが国でも関心の高まりつつあるジオパークについて、その先進地とされる中国の事例に焦点をあて、中国河南省の伏牛山世界ジオパークを研究対象としてジオツーリズムの現状の一端に迫ることを試みた。

その結果、中国のジオパークは国際的な制度が確立する以前から国家地質公園制度を設けるなど、ジオツーリズムの展開に関して高い可能性を有しており、世界ジオパークに認定された地域もそれまでの活動の蓄積に立脚した独自の性質(アミューズメント性)の高さが明確になった。当然ながら、GGNの認定方針を最低限クリアできる水準の運営が指向されているものの、地域住民の参画の面で理念と現実の乖離が顕在化しており、この点は今後中国が引き続きジオパークの国際的な牽引役となり得るのかを決定づける課題と位置づけられる。地域住民が何らかの形で自地域のジオツーリズムに主体的にかかわる仕組みをどのように再構築していくのか、今後も注目していきたい。

なお、本稿では中国の世界ジオパークの1つに焦点をあてて議論を進めてきたが、他の認定地域の事例との比較考察や経年的変化も踏まえた研究の深化に努めたいと考えている。また、2012年の第5回ジオパーク国際ユネスコ会議における大会宣言(島原宣言)でも示されたように、ジオパークは、ジオツーリズムの展開にとどまらず防災や減災について関心を高める仕組みであるという側面も今後ジオパークの議論を進めていく際に重要な視点となっていくであろう。このことについても、中国を含めた各地のジオパークが持つ役割に注目すべきである。記して今後の課題としたい。

注 記

- 1) 中国ジオパークネットワーク(CGN)制作のCD『中国地質公園』(2012年4月)による。

- 2) 中国語の原文のまま引用している。日本語では、「科学的な知識をあげめ尊ぶ、迷信を打ち破ること」の意味。
- 3) [中国网](http://www.china.com.cn/zhuanti2005/node_5608381.htm) http://www.china.com.cn/zhuanti2005/node_5608381.htm 『建立国家地质公园的意义』(国土资源部による提供資料)による。2012年8月11日閲覧。
- 4) 同上1)。
- 5) 同上1)。
- 6) 国家地質公園計画編制技術要求』をもとにして作成された『伏牛山世界ジオパークにおける嵩県地域の地質ガイドブック』のことである。
- 7) [GGN ホームページ](http://cn.globalgeopark.org/) <http://cn.globalgeopark.org/> による。2012年4月25日閲覧。

付 記

中国伏牛山世界ジオパークにおいてアンケートに協力していただいた中国人観光客の皆様および聞き取りに応じていただいた河南省嵩県国土资源局職員の皆様に、深くお礼申しあげる。

本研究を進めるにあたり、島原半島ジオパーク推進連絡協議会「平成24年度島原半島ジオパーク学術研究奨励事業」助成金(代表者:楊燕)および科学研究費補助金・若手研究(B)「担い手のライフヒストリーからみたジオパークの観光化プロセスに関する研究」(課題番号:25870520)を使用した。また、本研究の一部は、2012年5月に開催された第5回ジオパーク国際ユネスコ会議において発表した。

文 献

- 岩松 暉・星野一男(2005): ジオパークと地質遺産の保全・活用. 地球環境, 10, pp.185-196.
- 深見 聡(2010): ジオパークとジオツーリズムの成立に関する一考察. 地域総合研究, 38(1), pp.63-72.
- 深見 聡・有馬貴之(2011): 九州のジオパークに対

- する観光客のイメージ—4 つのジオパークにおける観光客アンケート調査から—. 地域環境研究, 3, pp.47-54.
- 目代邦康・菊地俊夫・渡辺真人・渡辺一徳・大野希一・長谷義隆・鵜飼宏明・廣瀬浩司・崎田博之・岩本薫・井村隆介・横山秀司・深見 聡(2012): 九州のジオパークの現状とこれから. E-journal GEO, 7(1), pp.94-102.
- 矢島道子(2009): ジオパークとは何か—日本型ジオパークへの提言. 観光文化, 196, pp.12-15.
- 陈安泽(2003): 中国国家地质公园建设的若干问题. 资源・产业, 5(1), pp.58-64.
- 董静・郑天然・张雪梅(2006): 国家地质公园研究综述. 石家庄学院学报, 8(6), pp.86-92.
- 许涛・田明中(2010): 我国国家地质公园旅游系统研究进展与趋势. 旅游学刊, 25(11), pp.84-92.
- 赵逊・赵汀(2009): 地质公园发展与管理. 地球学报, 30(3), pp.301-308.
- (投稿: 2013. 10. 26)
- (受理: 2013. 11. 05)